みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

特集：世界の人類学 2：序論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹沢, 尚一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003928

国立民族学博物館研究報告33(3): 301-310 (2009)

特集：世界の人類学　2

序　論

竹　沢　尚一郎 *

Anthropology across the World II

Shoichiro Takezawa

This is the second special edition on World Anthropologies. The first was based on the annual meeting of the Kansai Branch of the Japanese Society of Cultural Anthropology held on October 15th 2005, and appeared in volume 31(1) of the same bulletin. This second special edition is also based on the annual meeting of the Kansai Branch, held on July 7th 2007.

Thus, the form of the two editions is the same, but their content is quite different. Following the development of anthropological thought in the four leading countries in Anthropology (the United States, France, Britain, and China), the first edition tried to make clear the characteristics of each Anthropology. Emphasis was put upon their educational systems, considering these to be a key to predicting the future of each Anthropology.

The second edition, in contrast, changes the target countries and the object of discussion. Taking up four countries, the United States, Germany, India and Australia, this edition focuses on the relationship between Anthropology and its related disciplines: Cultural Studies in the US, Ethnology in Germany, Subaltern Studies in India, and Multiculturalism in Australia. Why do we choose this topic? There are two reasons. Firstly, although they are branches of cultural studies like Anthropology, these other disciplines generally aim at culture on the national scale, while anthropological investigations are often carried out on minority or ethnic group cultures. Secondly, they show a strong tendency to focus on the political aspects of cultural practices, while anthropological studies often neglect these. If there is a methodological difference between Anthropology and these other disciplines, it will be fruitful to examine them closely to rethink Anthropology, which has been said to be in difficulties.

* 国立民族学博物館民族文化研究部

特集「世界の人類学　2」をお届けする。

前回の特集「世界の人類学 1」は，2006 年発行の『国立民族学博物館研究報告』第 31 巻 1 号に掲載された。そのもとになったのは，2005 年 10 月 29 日に日本文化人類学会近畿地区研究懇談会で実施したシンポジウム「人類学はなにをめざすのか」（国立民族学博物館研究戦略センターとの共催）における 4 本の発表であった。今回の特集も，やはり日本文化人類学会近畿地区研究懇談会（国立民族学博物館研究戦略センターと大阪大学グローバルコラボレーションセンターとの共催）を舞台として，2007 年 7 月 7 日におこなわれた 4 本の発表がもとになっている。しかし，前回の特集と今回の特集では力点が異なっている。その点をまず明らかにしておこう。

前回の特集は第 1 回の試みということもあり，これまで世界の人類学の発展に寄与してきたアメリカ合衆国，イギリス，フランス，そして中国の人類学の歴史および現状と，それぞれが抱える課題を明らかにすることを目的としておこなわれた。と同時に，シンポジウムに参加されたり『国立民族学博物館研究報告』を読まれたりする方々の多くが，大学等で人類学を教え／学んでいることを想定して，各国の教育機関でいかなる人類学教育が実施され，どのようにして人類学の再生産が実現されているかに焦点を当てていた。とはいっても，とりあげた国々の人類学はそれぞれ 100 年を越える（あるいはそれに近い）歴史をもっている。そのため，ひとりの研究者が各国の人類学の全体をカバーすることは不可能なので，4 人の研究者が多少とも恣意的に切り取りないしフィールドワークした 4 つの国の人類学の「現状」を明らかにすることをめざすものとなった。幸いこの特集は，このような比較がそれまでほとんど試みられていなかったこともあり，好意をもって迎えられ，継続を期待する声があがっていた。そのことが，第 2 弾を計画した理由のひとつである。

今回お届けする「世界の人類学　2」は，前回とは趣旨を変えている。とりあげるのが，アメリカ合衆国とドイツという人類学の発展に寄与してきた国々だけでなく，インドとオーストラリアという，これまでむしろ人類学の研究対象となってきた国々の人類学を対象としていること。そして，前回が人類学の再生産が中心的な課題になっていたとすれば，今回は人類学が今日抱えている諸問題に向きあうべく，人類学と隣接諸科学との関係性が焦点化されていること，である。たとえば米山リサの論文は，彼女の専門でもあるカルチュラル・スタディーズと合衆国の人類学のあいだの微妙な関係をとりあげているし，インド研究を専門とする田辺明生の考察においては，人類学とサバルタン・スタディーズとのあいだの相克を含んだ関係性が中心的な課題となっている。ドイツにおける民俗学と人類学とのあいだの関係性を歴史的観点から

論じた森明子の論文も，1980 年代以降のオーストラリアにおける主要政策としてのマルチカルチュラリズムが人類学にいかなる影響を与えてきたかを論じた大野あき子の論文も，おなじ視点を含んでいる。

このように人類学と隣接諸科学との関係を論じることが，なぜ今の時点で必要だと考えられるのか。人類学の成立史を簡単にふり返りながら，整理しておこう。

人類学の歴史については別のところでくわしく論じているので（竹沢 2007），ここでは反復しない。ここで整理しておきたいことは，第 2 次世界大戦以降の人類学の歩みである。海外の広大な植民地，とりわけアフリカ大陸における植民地社会研究として制度化されたイギリスとフランスの人類学は，社会学と密接な関係を維持しながら，社会人類学を自称しつづけた[1)]。それが主に対象としたのは，植民地統治にとって不可欠である，現地社会の政治組織や親族関係，経済活動，紛争の解決法などであった。そのことは，エヴァンズ＝プリチャードやフォーテスらの手になり，イギリス人類学のひとつのピークを構成した 2 冊の論文集が『アフリカの政治体系』と『アフリカの親族システム』をテーマとしていたことに示されている（フォーテスとエヴァンズ＝プリチャード編 1972; Radcliffe-Brown and Forde (eds.) 1950）。これらの論文集に寄稿した人類学者の多くは，学問の「自律性」を擁護すべく，植民地支配の正当化や地域支配のための基礎作業の実施といった社会的要請から距離をおこうとしたが（竹沢 2001），そのことは人類学が「理論」や「イズム」[2)] に関心を集中させ，植民地各地の社会で現に生じている社会的課題に背を向ける結果をもたらすことになった。

一方，アメリカ合衆国では，人類学が対象としたのは，まず自国内の先住民諸文化であり，ついで南北アメリカ大陸内部の先住民諸文化であった。ヨーロッパのさまざまな国から来た移住民と先住民とが抗争／共存しながら築いた国家であるアメリカ合衆国では，ドミナントな文化が存在していたヨーロッパ諸国と異なり，文化の多様性は目に見えるかたちで存在していた。その一方で，アメリカ合衆国は単一の社会であることが要請されていたので，人類学が研究対象としたのは文化であって，社会ではなかった[3)]（船曳 1988）。そして文化を主対象としたことで，文化人類学は自然からの文化の出現を対象とする学問だという自己規定が形成され（ここでいう文化は自然の対立項としてのそれであり，そこから文化の成立を総合的に研究しようという傾向が生じていた），今日につづくアメリカ人類学の 4 分野体制――文化人類学，言語学，考古学，形質人類学からなるそれ――が築かれたのである。

合衆国におけるこうした傾向性を固定させたのが，1958 年に『アメリカ社会学雑

誌』に掲載された短い論文であったのは疑いない。アメリカ社会学の大御所パーソンズと，当時アメリカ人類学会長であったクローバーが連名で書いたその論文は，わずか 2 ページの短いものでしかなかった。しかし，社会学と人類学を代表するふたりの研究者が，ふたつの学問の棲み分けないし「手打ち」をめざしたこの論文の影響は，その後長く残りつづけることになったのである。

この論文はまず，それまで社会学と人類学のあいだに混乱があったことを述べている。その上で，その混乱を収めるべく，社会学と人類学の境界を明確にしようとする。その境界は，第 1 に研究対象のうちに規定され，社会学が文字のある社会を対象とするのに対し，人類学の対象は「無文字社会」だとされた。そして第 2 に，社会学が社会関係や社会システムの研究に専念するのに対し，人類学は文化を，すなわち「価値，観念，その他の象徴・意味体系の，伝達され創造されるパターンや内容」を研究対象とすると明言したのである（Kroeber and Parsons 1958: 583）。

今から 50 年も前のこの論文を，ここで再度とりあげるのには理由がある。それは，人類学が文化研究として自己定義したことが，自文化研究を排除した上での「無文字社会」の文化の研究という，研究対象の限定と表裏一体であったことを明確にするためである[4)]。この論文が出版された 1958 年には，西洋列強および日本による植民地支配の後始末ともいうべき朝鮮戦争は終結していたし，ディエンビエンフーの敗戦によりフランス植民地支配も終わっていた。熱帯アフリカではガーナやギニアが独立を迎えたばかりであったし，いわゆる第三世界の諸国が反植民地主義と非同盟を謳い文句にバンドン会議に集ったのは 1955 年のことであった。

このような時期に，人類学が研究対象を第三世界の社会と規定するのではなく，「無文字社会」に限定したことは，今から振り返ればある種のアナクロニズムとしかいいようのないものがある。それによって人類学は，アジアやアフリカの各地で生じていた世界史的なうねりに背を向けることを自他に対して宣告したのであったし，かれらが生を組織するために抱えていた諸問題や諸課題を自分の問題として考えることができなくなったのである。

もちろん人類学は政治学や経済学とは異なる学問分野であるのだから，人類学者のすべてが独立運動に関心をもつ必要はないし，新興国家が抱える経済的課題について回答を用意する義務もない。ただ，人類学が，19 世紀の西欧において確立された哲史文などへの知の細分化に抗しつつ，ホーリスティックな視点を骨子として築かれた学問であったとすれば[5)]，対象社会が国家の編成のなかでどのように位置づけられているか，地域的な文化的実践が支配的な権力関係によってどのように管理ないし影響

されているか，などの課題を考えることは不可欠な作業であっただろう。

1983 年に出版されたフェビアンの『時間と他者』は，（当時の）人類学の有力な認識方法としての機能主義やベネディクト風の文化相対主義，あるいは構造主義が，いずれも対象社会を囲い込み，歴史を共有しない人びと，それゆえ問題を共有しない人びととして，自分たちから切り離していくためのテクニックとして作用していたことを明確にしている（Fabian 1983）。今から見れば当然過ぎるほどの議論であるが，当時は人類学の支配的風潮に逆らうものとして，いわばおずおずと差し出された見解であった。

もっとも，このフェビアンの本と前後して，人類学の基本的営為としてのフィールドワークを疑問に付すストッキング・ジュニアやクリフォードの著名な論文が 1983 年に出版され（Stocking Jr. 1983; Clifford 1983），1986 年には人類学に反省と懐疑とを投げかけた『文化を書く』と『文化批判としての人類学』が出版されたことを考えるなら（クリフォードとマーカス 1996; マーカスとフィッシャー 1989），クローバーらによる上記の人類学の自己定義に対する懐疑は，1980 年代の前半には人類学の内部でもかなりの広がりをもって共有されていたと考えるべきであろう。

問題は，こうした反省や懐疑が人類学の内部から生じていたのか，それとも外部における視点や方法の変化に促されるかたちで生じていたのか，ということである。この問いに関し，答えは明白であると思われる。独立直前のガーナとコートジボワールで都市住民のボランタリー組織を研究していたウォーラーステインが，アフリカ社会を理解するには世界史的視点が不可欠だとして「世界システム論」を提唱したのが 1974 年（ウォーラーステイン 1981; cf. 竹沢 1999）。文化が価値や象徴のシステムにとどまるわけではなく，権力の構成とその作用に不可欠な要素として機能していることを明確にしたフーコーの『監獄の誕生』などの著作が出版されたのが 1975 年（フーコー 1977）。フーコーの議論に触発されつつ，非西洋の文化と社会について語ってきた西洋近代のオリエンタリストの言説が，いかなる構造をもち，どのように他者の排除と支配に利用されてきたかを論じたサイードの『オリエンタリズム』の出版が 1978 年（サイード 1986）。国家の枠より階級闘争を優先させるマルクス主義的認識に沿って，文化における対立や支配を重視するカルチュラル・スタディーズの諸論考が発表された『ソーシャル・テクスト』誌や『理論・文化・社会』誌の刊行開始が 1980 年前後。こうした傾向を押さえるなら，人類学的文化研究の内閉を打破したのは，人類学内部の反省であったというより，むしろ人類学の外部で練りあげられていた文化研究の方法の革新であったというべきであろう。

気がつけば，人類学的文化研究は他の諸分野から孤立して，その方法と視線の閉塞が他から批判ないし（一層悪いことに）無視されはじめていた。それが，今から振り返れば，20 年ほど前の人類学をとり巻く状況だったのではなかったか。今回とりあげた人類学の隣接諸分野についていえば，オーストラリアにおけるマルチカルチュラリズムの端緒となる「北部準州アボリジニ土地権利法」が制定されたのが 1976 年（大野論文）。インドにおけるサバルタン・スタディーズの刊行開始が 1982 年（田辺論文）。アメリカ合衆国でカルチュラル・スタディーズの影響などを受けつつ，合衆国人類学の基本であった 4 分野制に対する批判が激しくなったのが「この十数年」であった（米山論文）。人類学は，内的な発展ないし限界性の認識の結果としてではなく，むしろ隣接諸分野において実現された文化研究の革新に影響されるかたちで，その学的位置づけを再考することを求められてきたのである。

こうして見てくれば，人類学が今後どのような道を歩み，いかなる課題と方向性を自己に引き受けていくかを考えるためにも，隣接諸分野が現になにと格闘しており，そこでいかなる認識と研究方法の革新が実現されているかを見ておくことは不可欠な作業といえよう。今回の特集に収めた4本の論文は，とりあげている地域も，隣接諸分野も大きく異なるだけでなく，それぞれがあまりに豊かな内容をもっているので，要約することはほとんど意味をなさない。それゆえ，ここではそれらの内容を紹介するようつとめるより，そこに共通する問題関心ないしテーマを明確にするよう試みたい。

以下の論考に共通する第 1 の特徴は，人類学であれその隣接諸科学であれ，学の存在そのものが拭いがたく孕む政治性ないし政治的背景に着目することである。アメリカ合衆国の人類学がナショナリズムと密接に結びついて存在してきたことを批判する米山は，「冷戦期の合衆国は，世界戦略のなかで自らの帝国主義を旧西欧植民地主義とは異なるものとして掲げ，北米人類学はそのプロパガンダの一翼を担った」と断言し，それへの決別を制度的に保証しようとするヤナギサコらの試みを紹介している。田辺が論ずるサバルタン・スタディーズにおいては，その学の存在そのものが，政治的劣位におかれてきたサバルタンの自己認識・他者認識の変革とその社会経済的状況の変革を求めているという点で，政治の問題は学の出発点にある。

一方，ドイツにおける民族学と民俗学の関係性から議論をはじめる森によれば，第二次世界大戦前のドイツ民俗学はまさにナチス「政権の称揚する文化政策に協力」していたのであり，戦後のドイツ民俗学・文化人類学の確立はそれからの変革ないし離脱の試みとして位置づけられる。他方，1970 年代以降マルチカルチュラリズムが国の政策として採用されたオーストラリアにおいては，大野が詳細に検討しているよう

に，人類学のあり方そのものが国家の基本政策としてのマルチカルチュラリズムとの理論的および実践的な葛藤を不可分に含んでいる。

このように隣接諸分野が政治的課題と相関しながら成立し，それに各国の人類学も強く影響されてきたことについては，日本で人類学を実践する私たちにとっても他山の石ではないであろう。人類学者がいかなる社会を研究対象に選択するとしても，その社会が国家的および国際的な権力や市場経済のフォーメーションのなかに位置づけられて存在していること，そのなかで生きる諸個人もそのフォーメーションの作用を受容／対抗しつつ生を組織していることは明らかなのであり，それへの視線を欠くことは不可能である。そもそも人類学の成立そのものが，旧宗主国における植民地支配・ネオ植民地主義と密接に結びついて存在してきたことについては，すでにわが国でも多くの研究がなされている（山下・山本編 1997; 栗本・井野瀬編 1999; 中生編 2000; 竹沢 2001; 山地・田中編 2002; 坂野 2005）。また，今日の人類学の実践が，東西冷戦下で築かれた開発を至上のものとするネオ植民地主義体制といかなる関係をとり結んでいるかは，厳しく問われるべきものであろう。

4 本の論考に共通する第 2 の点は，支配的な認識枠組みに対する批判的な視点の存在である。たとえば田辺が格闘しているサバルタン・スタディーズにおいては，サバルタンとは支配階級から排除ないし劣位におかれた人びとであるのだから，それに注目することは，政治的主体としてのエリート層を中心に論じてきた従来の支配的な歴史記述・社会記述に対する挑戦となる。それだけでなく，「ヘゲモニックな記号体系を支配」するエリートに対し，その記号体系を「反乱の瞬間において変えようとする」サバルタンの試みに着目することで，「ヘゲモニックな記号体系を再生産する歴史叙述から免れ」うるというのである。米山もまた，大陸を越える人間の移動の歴史を踏まえるならば，ヨーロッパやアメリカの「自己」概念そのものが批判的にとらえ返されなくてはならないことについて触れた上で，人類学を「人間に関する主流で支配的な考えに対抗しようという闘争を支え，深めてゆくための科学」として再定義しようとする傾向性を紹介している。

大野は，自文化と異文化，われわれとかれらという従来人類学において用いられてきた二元法が特殊な視点から構築されていたことを批判した上で，歴史的に形成されたさまざまな差異の場としてのホーム研究を推進すべきこと，それによって人類学が，「諸個人が自らと向き合う契機」となることが望まれると主張する。ホーム研究と異文化研究の安易な対比を批判するのは森もおなじであり，多様な人びとや文化的慣行が存在する「現代の都市的環境においては，異文化と自文化は混交していること

が前提といえる」とした上で，人類学がその社会のなかでいかなる位置を占めるべきであるのかに一層自覚的になることを求めてその論考は終わっている。

この第 2 点とも関連することであるが，以下の論考に共通する第 3 点は，ホーリスティックな見方を優先させてきた人類学に対する，隣接諸学からの批判的視線の存在である。カルチュラル・スタディーズにせよ，サバルタン・スタディーズにせよ，マルチカルチュラリズムにせよ，現実にいかなる政治・文化的問題が生じているか，その問題に対してこれまでの諸科学がどれだけ有効であったのか，という反省的意識から出発している。そのためそこには，独自の方法と理論と研究対象を備えたものとしての学問的制度化を志向するより，むしろ既成の方法論や理論を借用・流用したり変形を加えたりすることで，新たな認識枠組みを作り出すことをめざす方向に向かっている。そうした方向性は，これらの学が・・スタディーズという複数形のかたちをとっていることに，なにより顕著に示されているであろう。

これに対し，すでに百年以上の歴史をもつ人類学は（この百年が長いか短いかは今はさておく），Anthropology という単数形の学問であると称している。もちろん，合衆国人類学，イギリス人類学，フランス人類学等々と，人類学を複数形で使用することは可能である。しかし，もし人類学 Anthropology が人類学的研究 anthroplogical studies になるとすれば，それへの抵抗も多いのではないか。研究対象となる社会や文化も研究方法もさまざまに異なる，多様性を内包する学としての人類学は，現実により適合可能な複数形の学になるべきなのか。それとも，人間にとっての普遍的事実の存在をどこかの片隅に構想する，単数形の学問であることをめざすのか。人類学という大枠は残しながら，その下位分野として「〇〇人類学」を加えていくことで対応可能だとする見方も一方にはあるだろうが，はたしてそれが人類学に課せられている諸課題に対する答えたりうるのか。それらの問いは学の存立そのものにかかわる問いであるが，それへの対応もまた隣接諸科学との対話のなかで自己決定すべきことであろう。

最後に，特集の形式について触れておく。以下の論考はシンポジウムにおける発表順に並べているが，インドとオーストラリアの事例は重なる点が多いと思われるので，オーストラリアに関する大野論文を先に置き，ドイツの森論文を最後に置いている。また，シンポジウムの司会は，前回に引き続き小泉潤二大阪大学大学院人間科学研究科教授にお願いした。小泉教授の的確な司会によって総合討論は白熱したが，紙面の都合と，読者の省察をミスリードすることを恐れて，ここには再録していない。批判やさまざまな意見を頂戴することを，編者として期待している。

注

1）イギリス人類学，とくにマリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンに代表される機能主義人類学は，フランスのデュルケームが開始した社会学によって決定的な影響を与えられていた（その影響は，マリノフスキーのゼミに出席していたタルコット・パーソンズによってアメリカ合衆国に移植された）。その後，イギリス社会人類学者の手で量産された一連のモノグラフは，自然環境や歴史の記述からはじめ，親族組織，政治体系，経済活動，技術，宗教観念など，対象社会の全側面を明らかにしようとするものであった。一方，デュルケームの甥のマルセル・モースが切り開いたフランスの人類学は，名称こそ社会人類学ないし民族学を称していたが，実際には同時代のパリに生じた文化運動としてのシュルレアリズムなどとも相関して，神話研究や宗教儀礼，芸術活動などに力点をおいたものになった。2 つの人類学の相違については，メアリ・ダグラスに短いが的確な論文がある（Douglas 1995）。

2）人類学がつねにあらたな方法を模索し，研究対象の画定と再画定をめざしてきたことは，人類学の下位分野の多様性が物語っている。それは，「進化論人類学」「機能主義人類学」「構造人類学」「象徴人類学」などの方法的差異を生む一方で，「社会人類学」「宗教人類学」「政治人類学」「生態人類学」「経済人類学」「芸術人類学」「開発人類学」「歴史人類学」「ジェンダー人類学」などの研究領域の細分化を生んできたのであった。

3）もちろんアメリカ人類学が文化人類学として自己規定したのは，外部からの要請だけによるものではなかった。19 世紀にドイツで洗練された「文化」概念を合衆国に移植し，人類学を文化研究として洗練させるのに貢献した，ドイツ出身のボアズからはじまり，ベネディクト，ミードとつづくコロンビア大の系譜がそこには存在したのである（竹沢 2007: 第 7 章）。

4）とはいえ，自文化に対するまなざしは研究者の省察から全面的に排除されたわけではなく，「他者」の文化を対比的に特徴づけるための基準点として，暗黙裡に喚起されつづけていた。人類学の著作のうちでもっとも売れ，外部に対して人類学の学問的（ないし商業的）価値を理解させたという点でもっとも影響力の大きかったベネディクトの『菊と刀』やレヴィ＝ストロースの『悲しき熱帯』は，自文化と他文化を対比させる比較文化論ないし比較文明論的性格を強くもっていた。

　ところで，文化の比較が可能であるためには，文化が内部において均質的・固定的であり，外部に対して明確に境界づけられていることが前提になる。これらの著作がきわめて力のある文化論を提供する一方で，文化本質主義を含意し再生産させてきたことは注記されるべきである（竹沢 2009（印刷中））。

5）ここでホーリスティックというとき，私はマルセル・モースの「贈与論」で最初に提示され，その後イギリス社会人類学の一連のモノグラフにおいてめざされた，対象社会を総体として理解しようとする試みをさしている（竹沢 2007: 第 4 章）。米山リサは以下の論考のなかで，合衆国人類学のホーリスティックなあり方を鋭く批判しているが，そこでいうホーリスティックとは，合衆国人類学の制度的特質としての形質・考古・言語・文化の 4 分野制をさすものであり，ここで用いているような意味ではない。

文　　献

ウォーラーステイン，イマニュエル
　1981 『近代世界システム I・II ――農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』川北稔訳，東京：岩波書店。
クリフォード，ジェイムズとジョージ・マーカス編
　1996 『文化を書く』春日直樹他訳，東京：紀伊国屋書店。
栗本英世・井野瀬久美惠編
　1999 『植民地経験――人類学と歴史学からのアプローチ』京都：人文書院。
サイード，エドワード，W.
　1986 『オリエンタリズム』板垣雄三他監修，今沢紀子訳，東京：平凡社。

坂野　徹
2005 『帝国日本と人類学者──1884–1952 年』東京：勁草書房。
竹沢尚一郎
1999 「世界システム論と人類学」『民族学研究』64(2): 175–177。
2001 『表象の植民地帝国──近代フランスと人文諸科学』京都：世界思想社。
2007 『人類学的思考の歴史』京都：世界思想社。
2009 「「文化」にどう向き合うか──文化人類学の立場から」『文化人類学研究』8（印刷中）。
中生勝美編
2000 『植民地人類学の展望』東京：風響社。
船曳建夫
1988 「文化と社会」伊藤幹治・米山俊直編『文化人類学へのアプローチ』pp. 17–46，京都：ミネルヴァ書房。
フォーテスとエヴァンズ＝プリチャード編
1972 『アフリカの伝統的政治体系』大森元吉他訳，東京：みすず書房。
フーコー，ミシェル
1977 『監獄の誕生──監視と処罰』田村俶訳，東京：新潮社。
ベネディクト，ルース
1967 『定訳　菊と刀──日本文化の型』長谷川松治訳，東京：社会思想社。
マーカス，ジョージとマイケル・フィッシャー
1989 『文化批判としての人類学──人間科学における実験的試み』永淵康之訳，東京：紀伊国屋書店。
山路勝彦・田中雅一編
2002 『植民地主義と人類学』西宮：関西学院大学出版会。
山下晋司・山本真鳥編
1997 『植民地主義と文化──人類学のパースペクティヴ』東京：新曜社。
レヴィ＝ストロース，クロード
1977 『悲しき熱帯』上・下，川田順造訳，東京：中央公論社。

外国語文献

Clifford, James
1983 On Ethnographic Authority. *Representations* 2: 118–146.
Douglas, Mary
1995 Réflexions sur le *Renard pâle* et deux anthropologies. In C. W. Thompson (éd.) *L'Autre et le sacré*, pp. 199–218. Paris: L'Harmattan.
Fabian, Johannes
1983 *Time and the Other: how anthropology makes its object*. New York: Columbia University Press.
Kroeber, A. and Tarcott Persons
1958 The Concepts of Culture and of Social Science. *American Sociological Review* 23(3): 582–583.
Radcliffe-Brown, A. R. and Daryll Forde (eds.)
1950 *African Systems of Kinship and Marriage*. Oxford: Oxford University Press.
Stocking Jr., George W.
1983 The Ethnographer's Magic. In G. Stocking Jr. (ed.) *Observers observed, History of Anthropology* I, pp. 70–120. Madison: Wisconsin University Press.